

被災地でアートにできること

What we can do with art in a disaster area

佐部利典彦

SABURI Norihiko

2011年に発生した東日本大震災から7年が経つ。未曾有の災害を目の当たりにし、「何かできることがあるのではないかと被災地で動いたアーティストがいる。被災地での活動を検証することによって、見えてくることがある。被災地で活動する中で、筆者は「ズレ」の感覚をもった。この「ズレ」の感覚はどこからくるものなのか。被災地の状況を目の当たりにすることによって様々な価値観が揺さぶられ、アートを様々なかたちで被災地へもって行ったことで、被災地でのアートの存在について、普遍的なアートの本質について考えることとなった。

キーワード：アート、ワークショップ、被災地、コミュニケーション

1. はじめに

2011年3月11日に東日本大震災が発生した。音楽家と美術家が小田原にあるすどう美術館¹に集まり、それぞれの立場で被災した地域で自分達ができること、行うべきことを考えた。同時期に中村政人氏が統括ディレクターである、アーツ千代田331は東日本大震災に対して、何ができるのかを考え、活動を行っている。アーツ千代田331を拠点に、様々なプロジェクトが行われた。この活動に対して、中村氏は、「美術の内部で解決するのではなく、アクションが被災地の実際の活動とどうつながっていくか、どんなことができるかという行動面のアイデアを見たかったんだけど、行動に結びついていない、たんにボランティアに行って瓦礫を見てきて、その経験で絵を描くというのではなく、もう少しアクティブなものがほしい」²と述べている。また、水戸芸術館現代美術センターでは、「3.11とアーティスト、進行形の記録」³という企画展が行われ、東日本大震災とそれぞれのスタンスで関わっている作家の活動について紹介している。筆者達は被災地で芸術活動を通して、何かできるのではないかという思いをもって、2011年に「東日本元気アートプロジェクト」を立ち上げて活動を開始した。活動資金はチャリティーコンサート、チャリティー展、寄付で集まったものを用い、現在まで、その活動を継続している。被災地での活動についての実践を検証するとともに、被災地で動いたアーティスト達の動向に触れながら、被災地でアートにできることについて考察する。

2. 被災地での活動について

筆者は、被災地で何が必要とされているのかを考えるために、2011年8月に岩手県大槌町と山田町の役場や、周辺を訪れ、役場で現状の様子をヒアリングした。自らも被災した役場の教育委員会の方から、生活が落ち着きつつある現状で、心が元気になることを必要としているという話があり、被災者の心に潤いをもたらす活動が必要であるとの認識をもった。第1回目の活動を2012年の4月に行う構想を立てた。4月に開催する活動の準備をしながら、それまでに具体的に行動できることとして、子ども達のために絵本の寄付を募って、届けることと、寒い時期をしのぐために湯たんぽに手作りのカバーをつけて送ることを実施した。現地での活動は、我々からの一方的なものではなく、我々と参加者との双方向性が必要であると考えた。鎮魂や復興を掲げたものは時期尚早であり、アートを通して被災者の方とつながることができる活動が必要であると考えた。今まで、アートに興味のなかった方や多くの年齢層に興味をもってもらえるように、観る、聴く、感じる、つくるという多様な要素のある活動にすることと、制作することに没頭でき、内面を自由に表出できる活動ができること、制作しながら会話をすることができ、同じ時間を共有することができることを活動のポイントであると考え、企画を立てた。概要は以下の通りである。

2-1. 開催概要

第一会場 会期 2012年4月27日(金)～29日(日)、時間 10時～17時30分(最終日～15時)

場所 岩手県下閉郡山田町八幡町3-20、山田町中央公民館小ホール

コンサート 4月28日(土)、29日(日)14時～

第二会場 会期 2012年4月30日(月)～5月4日(金)時間、10時～17時30分(最終日～15時)

場所 岩手県上閉伊郡大槌町小槌第32地割126、大槌町中央公民館3階大会議室

コンサート 4月30日(月)、5月1日(火)14時～

両会場とも開催期間中、美術ワークショップ、音楽ワークショップを行う。入場は無料。

展覧会はこの活動に参加する作家が、被災地を思い、被災地に展示することを考えて、制作した新作とすどう美術館のメインコレクションであり、人間の根源的な本質を表現していると評価されている物故作家、菅創吉の作品を展示した。コンサートは作品が展示されている空間において、来場者との距離感が近い、コンサートになるように意識して会場づくりを行った。ワークショップは参加者が、自由に表現をすることができ、完成後は仮設住宅に飾ることができる油絵制作と、つくりながら会話をすることができ、完成後には身に着けて楽しむことができるビーズのアクセサリーの制作を行った。工作もできるように、小田原の寄木細工の模様のある木材を切ったり、接着したりして、つくりたいものをつくるという3種類のワークショップを用意した。また、仮設住宅に展示ができるように作家の作品のプレゼントを用意した。

2-2. 実施の様子

展示では、来場者が熱心に、時間をかけて鑑賞する姿がみられた。開催期間中、全日来場される方もあり、個人個人のペースで作品を鑑賞される姿があった。また、展示作品を制作した作家が会場に常駐し、来場者と作品に関することや、被災の様子など、会話をし、交流をする姿がみ

られた。展覧会においては来場者の鑑賞する姿勢が印象的であった。画面に食い入るように作品を凝視する方が多かった。展示された作品は抽象的なものが多いのであるが、会話をすることで、抽象的だから、観る側の感じ方、解釈の幅があり、自由な捉え方で観ることができるという声があった。また、その場にその作品を制作した作家がいて、話をする事ができると、作品や作家がより身近なものになり、親しみが生まれてくるという声があった。作家が常駐し、来場者と交流することが必要であった。音楽の活動では、コンサートの前にバイオリンとギターの体験教室を開いた。子ども達が興味深そうに楽器に触れ、三十分程度の体験で、一曲弾けるようになる子もいた。来場者に語りかける進行と演奏者の気持ちのこもった演奏により、会場では、涙を流される方もみえた。音楽は瞬間的、直接的に鑑賞者の心に届き、感動を呼ぶ。このコンサートで気持ちが固くなっていて感情を表すことができなくなっていた心を少しほぐすことができたという声を多く聞いた。アートは、自分の好みや自分のペースで自由に観て、感じる事ができる。開催期間中毎日会場に訪れ、自分のペースで作品を鑑賞する方もみえた。アートに囲まれた会場でコンサートを行うことによって、より豊かな空間感を味わうことができるのも緊張とリラクスの心地よさにもつながると考えた。音楽による直接的な感動と、アートによる間接的な感動の2種類の感動には相互作用があると考えた。ワークショップの油絵制作では、自身の内面が表現された作品もあった。恐怖や悲しみを表現された方もあった。会期中、毎日来場され、表現に自信がないが、描いてみたいという気持ちが強くなり、来場されて、3日目目で油絵を描かれた方も



写真1 会場での会話の様子



写真2 コンサート



写真3 油絵ワークショップ



写真4 ビーズアクセサリーづくり

みえた。油絵制作では、人間の内面的な部分が出表する表現が多かった。生と死を目の当たりにした時の人間の感情を筆者は想像もつかないが、作品を食い入るように観る姿勢や、湧き出す感情をなぐりつけるように描く様子に心の傷の深さを考えさせられた。そのような感情を表現するには、油絵具は強い表現をすることが可能で、適した素材であったと考える。ビーズのアクセサリーづくりは女性に人気があり、制作しながらの会話も弾む様子がみられた。開催期間中に家族や、友達を誘われて、何度も来場される方もいた。寄木の端材の工作は幼児から低学年の子ども達が熱心に制作する姿がみられた。

2-3. 来場者のアンケート及び後日すどう美術館に届いた手紙について

来場者のアンケート、手紙から、この活動に対する思いを読み取りたいと考える。アンケートは来場者に任意でお願いし、手紙は後日、すどう美術館に届いたものである。

○アンケートより

- ・なかなか先が見えなく、将来に対する不安ばかり感じており時々イライラすることがあり、心のコントロールに困っております。今回の企画は一服の清涼剤でした。
- ・今日のような催しものがあると、困るとか悲しいとかを忘れ、元気に暮らすことができます。今日はわくわくどきどきの連続でした。
- ・ステキな絵、感じる絵を見ると、心がやすらぎます。
- ・当分の間、毎年開催してほしい。
- ・気持ちが大きくなり、晴れ晴れとしました。色彩が気持ちよかったです。初めて見学しましたがよかったです。ただただ感謝です。ありがとうございます。
- ・実際に子ども達がものづくりができてとても楽しめました。

○手紙より

- ・この度はすばらしい絵をお送りいただき、感謝しております。知り合いに「この絵が欲しい、無理だとは思いますが万が一当たるといふこともあるしね。」と応募しました。ただただうれしいです。主人が休みの日、盛岡で額を買って求めようと思っております。作者の方に大切に飾らしていただくおねおね願えればと思います。ありがとうございます。
- ・この度は絵のプレゼントありがとうございました。自宅までお送りいただき感謝いたします。音楽が生で聴け、美しいアートを観ての至福の時間本当にありがとうございます。あの震災で私自身五十年の積み重ねのレコード三百枚、オーディオ機器など、ピアノを含め、すべてを失いました。音と本と絵と…失ったものは戻ってきませんが、皆様のこのプロジェクトで少し元気をいただきました。このいただいた絵を大事に次の目標に向け進もうと思います。また、いつかお会いできればと願っております。皆様のこの「まごころ」を心に日々すすんでまいります。(67歳男性)

被災者の方の固く閉ざされた心に入っていき音楽はその心をほぐし、作品制作によって自分の内面を表現することは、心情を吐露することとなる。岩手県大槌町に設置された、震災で会えな

くなった人の思いを伝えるため、心情を吐露するための「風の電話」や、宮城県陸前高田市に設置された行くあてのない手紙が流れ着く「漂流ポスト」は被災された方が心情を吐露できる方法となっているが、今回の活動は同様に心の動きに関わる活動の一端をになうことができる。

2-4. 参加作家の考えたこと

作品を展示し、現地で活動した美術家や音楽家の声を事後の振り返りで行ったアンケートより抜粋する。

- ・東日本げんきアートプロジェクトに参加して 利根川佳江⁴

私が大槌町に着いたのは、4月27日の夕方でした。海沿いの町はまだ津波の痕が生々しく残り、現実なのか悪い夢なのかよくわからなくなるような異様な光景が広がっています。着いてすぐに展覧会初日を迎えている山田町の会場へ向かいました。今回のプロジェクトで、私は主にワークショップのビーズアクセサリーコーナーを準備の段階から担当しました。どのくらい人が集まってくれるのか、楽しんでもらえるだろうか？等々、思いを巡らしながら楽しみ半分、不安半分で会場に入っていくと、ギャッペのメンバーのSさんが「ビーズコーナー、大人気！」と声をかけてくれました。よかった、ありがとう！そんな気持ちでいっぱいになりました。2日目、午前中から小さなお子さんからお年寄りの方まで、少しずつ来てくれる人が増えてきて、ビーズのコーナーも入れ替わり立ち替わり、みんな夢中になってブレスレットを作っていきます。一人で3個も4個も作られる方、「これはお母さんに、これはお父さんに、これはお兄ちゃんに。」そう言いながらあつという間に作ってしまう小学生の姉妹、こちらが圧倒されっぱなしでした。出来上がったブレスレットがまたどれも素敵なものばかり。作りながら、「山田にも手芸屋さんがあったんだけど流されちゃって…」「キラキラしててきれいね」とつぶやくように仰る方、ときどきもれてくる言葉にドキッとさせられながらも、自分で作ったブレスレットを「ステキね！」「これいいわ。」と嬉しそうに着けて会場を出て行かれる姿を見て、私も嬉しくなり、胸がいっぱいになりました。ビーズ、缶バッチ、油絵、寄せ木の工作、どのテーブルでも素敵な作品が次々に生まれ、こちらの方が元気をもらっているように思います。また2日目、3日目のバイオリンとギターのコンサートでは、心のこもった演奏に涙が止まらない方もいらっしゃいました。アートに触れるということ、何かを作るということは、本当に生命を活性化させることなんだ、ということ強く感じました。被災地から戻り、2ヶ月近く経ちますが、まだあまり頭の中が整理できていません。ショックも大きかった。けれどもこのプロジェクトに参加出来て本当に良かったと思います。ありがとうございました。そして見に来てくれた大槌町、山田町の皆さん本当にありがとうございました。

- ・2012年 被災地レポート 大鹿由希⁵

ギターとバイオリンの二人で4回のコンサートを行った。会場では作品に囲まれて演奏できる場所を選び、パネルや台を利用して音響を改善。プログラムはスペイン民謡やタンゴ、ソロの作品を中心に組み、日本の歌やアニメの主題歌など日本人として残していきたい曲も選曲。プログ

ラムや衣装などを毎回工夫した。演奏中は被災者の方々が空間に身を任せてじっと音に集中しているのを感じ、とても意味のある時間だと思った。ワークショップや展覧会で慣れ親しんだ場所でのコンサートは一体感があってよかったと思う。長く滞在したため顔なじみになった被災者やボランティアの方々と共に、和やかな雰囲気最後のコンサートを迎えることができた。事前にギター、バイオリン、ウクレレの寄付を募り、集まった楽器8台をメンテナンス。被災地ではその楽器を使って演奏体験をしてもらった。少し上達した方は簡単なアンサンブルも体験。楽器を扱えそうな方には応募をお勧めし、ほぼ希望通りに楽器を寄付することができた。マンツーマンで丁寧に指導しているうちに個人的な話を始める方も多く、被災の状況や家族のことなど、様々な話を聞くことができた。今後のケアが必要なのではないかと思うが、まだできていない。また機会を作って楽器のケアや指導ができたらと思う。被災地に入って、最初は何ができるのかと不安になった。何日も滞在しているうちに、被災者の固まっていた感情がある瞬間に動き出すような場面に何度も出会い、音楽や美術によってそのきっかけを作ることができたのだとしたらそれはとても意味のある活動だと思った。また、コンサートを聴きにいらした傾聴ボランティアの方が演奏を聴いて涙が止まらなくなってしまったということがあり、この方は震災後初めて涙がでてきたとおっしゃっていた。被災者だけでなくそこに滞在している支援者の方々にも辛い思いが蓄積されてきているのだということを思い知らされた。

2-5. まとめ

作品のプレゼントが大変喜ばれるのは、こちらの予想を超えていた。ワークショップで制作された作品とプレゼントで得た作品を仮設住宅の玄関と部屋に飾ると、殺風景な仮設の空間が明るくなり、気持ちが元気になるという声があった。そして、その作品によって、ここで出会った作家達と被災者がつながっていることが思い起こされて、うれしいという声もあった。被災地に思いを寄せ、作品を制作し、現地に赴いて、展示、ワークショップを行った。アート活動を行いにいくのではなく、アートをツールにして、人と関わりに行ったのだと振り返ることができる。甚大なる被害の大きさ、悲しみの大きさ、当事者ではない我々が理解できるものではない。しかし我々の活動において、固まっていた気持ちを緩めることができたり、今まで、アートに全く興味がなかった人がアートに対して興味をもったり、参加者が熱心に鑑賞、制作を行ったということは、被災地でアートにできることがあるといえると考えます。また、大鹿氏がいうように、被災者を支え続ける活動をしている人やボランティアの方も疲弊をしていて、その人達に対しても本活動は何らかの影響があったと考える。

3. 課題から第2回目の活動へ

被災地での1回目の活動は手探り状態から始まったが、活動の意義を見出すことができた。来場してもらえれば、何か、感じて帰ってもらえることができる。展示、コンサート、ワークショップにおいては、活動の方向性は現状の方向性でよいと考えた。1回目はアートをツールとして、被災者とつながりをつくることができたが、来場者とより近い距離でつながりやすい状況を作る必要があると考えた。人が訪れやすい場所で落ち着いてアートができる場所はどこなのかを考え直すことになった。

3-1. 開催概要

会期 2013年7月4日(木)～8日(月)、時間 10時～17時30分(最終日～15時)

場所 岩手県上閉伊郡大槌町小槌 22-54-4 大槌町寺野弓道場

コンサート 7月4日(木)5日(金)6日(土)7日(日)

開催期間中アートワークショップ開催。

3-2. 実施の様子

会場は仮設住宅と学校施設が近いことを考えて、弓道場で開催することとした。展示空間の大きさの都合ですどう美術館のコレクションは展示せず、参加作家の作品を展示した。ワークショップは前回、好評だった油絵とビーズアクセサリーづくりを中心に似顔絵コーナーを新設した。第1回目に引き続き、作品のプレゼントを行った。石原氏⁶は長年顔をテーマに制作している。そこで、来場者をモデルに似顔絵コーナーを設けることにした。来場者の内面を捉えた似顔絵というものではなく、来場者とつながるためのツールとして使いながら、作家のテーマとしての「顔」にこだわった。似顔絵を制作しながら、そのモデルになっている来場者と語り合った。筆者は即興的な制作に興味をもっており、また、来場者の興味を深めるためにコンサートの時に音楽に合わせてライブペイントを行うことにした。コンサートは総勢5名の世界で活躍する奏者を迎え、バラエティーに富んだ演奏を行った。



写真5 似顔絵ワークショップ



写真6 ライブペインティング

3-3. 来場者の手紙について

すどう美術館様が当地に来ていただきましたのは、七月初め、その後の私は人が変わったと自分でも思うくらい自分の体力、気力に自信がもてるようになりました。去年は部屋で「すどう美術館がやってくる」ということをラジオで聞いて、行きたいけど、行けないと自問自答していたのを思い出します。今年は友達の話もあり、出かけました。すばらしい絵と大好きな音楽、最初の一日目ですっかりとりこになり、四日間通い続けました。あの暑い中一人でバスを乗り継ぎ、よく出かけたものがと自分でも思います。今まで好きだった曲をかけるのに胸がキューンと痛くなり、悲しい気持ちになるのは、何故だろうと思っていました。今考えると被災した後の後遺症だったのかなと思います。それが最初のギターの色に胸躍らせ、絵の色彩に魅せられ、その一

日で今までの自分をかなぐり捨てられたように思います。夢のような一日でした。これ程興奮した日はなかったように思います。鷺見さんの半球儀状の作品三点今でも色鮮やかに記憶に残っています。また、椿を描かせていただき、大切にしています。加藤さんの5cm角に切った新聞紙を丸め、糊に色を混ぜた中に入れ(そのように記憶しておりますが)一つ一つ張り付けた作品の気の遠くなるような仕事(作品)あの色合いも記憶の中にしまっています。色彩のきれいな絵、細い線の作品、どれもすばらしく、作者の名前と絵が一致しませんが、あんな作品もあった、こんな作品もあったと思い出すと楽しくなります。また高橋玉恵さんより、「私の絵を選んでいただきありがとうございます」というメッセージが入った「風」という題のパネルが送られてきました。本当にありがとうございます。この絵を選んで本当によかったです。いかなる日もあの「風」にいやされています。パネルですので、額に入れることが出来ないで、ラップで覆って埃がつかないように大切に目の前に掛けました。また、八十歳になる方が作ったという花に小さな折鶴、大変な手作業なのに、私たちに届けたいという気持ちで一個一個作ったにかと思うと、涙が出ました。また、音楽もすばらしかったです。二日目のギターとバイオリン、ますます気持ちが高ぶり、三日目の弦楽四重奏、四日目、最終日バッハのカノンの演奏、南部牛追い歌も四重奏で奏でるとこうなるんだと感激と興奮の毎日でした。すばらしい生演奏に出会い、音色に魅せられ、毎日通い続けて元気になりました。皆様方に感謝し、どこか沈みかけていたであろう自分も七月に元気になりその姿を見て、元の仲間がいろいろと声をかけてくださり、出掛ける機会が増え、七月、八月と大変忙しくしてきました。これもすどう美術館様のおかげと感謝しております。すどう美術館様のますますの御発展と皆様のご活躍、心より願ってやみません。また、お会いできたら幸せです。乱文、乱筆ですが、お礼と感謝の気持ちで筆を執りました。

(60代 女性)

3-4. 参加作家の考えたこと

利根川佳江(2度目の参加)

早いもので大槌から帰って一月が過ぎようとしています。私は今回、来て下さった方とできるだけお話したいと思っていたのですが、ワークショップもあり、なかなかゆっくり話を聞くのは難しかったです。でもそんな中、震災当時の話をして下さった方がいらしたのでご紹介します。3日目のコンサートが終わった後、震災当時この弓道場に避難していたという男性が話しかけて下さいました。その方の話によると、ここでは多い時で800人くらいの人が避難していたそうです。3月のまだまだ寒い時期に、床は砂の地面にシートを敷いただけ。避難してきたのにここで亡くなられた方が何人もいて、ご遺体は葬場がないからシートにくるんで盛岡まで運ばなくてはならなかったそうです。この方は身内の方が20人も亡くなられたと仰っていました。想像を絶することが本当にあったのだと言葉が出ません。4日目のコンサートの休憩時間に何気なく話しかけた女性の方は、音楽で少し気持ちが解れたのか、何も聞かないのに震災当時のことを話して下さいました。最初はとにかく必死で避難して、でも幸いその方の家はぎりぎり助かったので、2~3ヶ月の間、避難して来た人の避難所になっていたそうです。一度流されて1回りして屋根の所で助かった人もいたけれど、せつかく避難して来た老夫婦が、荷物を取りに戻って第2波に流されてしまった、そういう人が多かったと仰っていました。コンサートはなかなか聴く機会がな

いのでよかったとも言っていました。被災地の方から直接伺うお話は、テレビや写真などで見るよりも生々しく当時の様子が伝わってきます。実際に体験した方の恐怖や痛み、悲しみがそのまま伝わってくるからだろうと思います。震災後ボランティアで何度も来ている方が、震災直後は話すことができなかつた人が、2年が過ぎてようやく話せるようになってきていると言っていました。まだ何も終わっていないことに改めて気づかされます。心がたとえ一時でも解放される機会がもっと必要だと思いました。もっともっと吐き出したい人がたくさんいるのでは…？GAPPE はささやかな活動ですが、ご来場いただいた方の心がどうか少しでも軽くなりますようにと願わずにはられません。この写真は3日目の夕方、商店街でのコンサートの途中に現れた虹です。

3-5. まとめ

手紙をいただいた60代の女性のように、一人でも、ここまで、被災者の気持ちに何か残すことができるのであれば、この活動を行う意義があると考えます。作家の手記から察するに、作家はこの活動を行うことによって、訪れる人と向き合っている。被災者と向き合うからこそ感じ合えることができ、そこに絆が生まれ、互いに明日を生きる気持ちをもつきっかけになると考える。今回の弓道場は仮設や学校の近くにあり、より人が訪れやすいように考えたのではあるが、作家の手記にあるように、様々な負の記憶をもってしまった場所であり、訪れる気にならなかつた人もあつたようである。

前回と同様に被災者を支えているボランティアの方とも関わりが増え、地元の商店街ともつながりができてきた。この活動を続けていくうえで重要な地元との信頼関係が少しずつできてきたと考える。また、自身も被災し家族を亡くしながらも、この活動をサポートした40代の男性がいた。車や人の手配、展示用パネルの運搬や設置など、我々の活動を全面的に支えた。1回目、2回目ともに会場の設営、撤去作業等を共に行つた。「昨年のすどう美術館の活動がなければ、一生、アートなんかに触れることも、興味をもつこともなかつたでしょう。コンサートはとても胸を打たれたし、油絵制作は没頭してしまつた。自分で制作した油絵作品は仮設住宅の玄関に、すどう美術館からプレゼントでもらつた作品は、ワンルームの居間に大事に飾つてあります。仮設の家の壁に何も無いのと絵があるのでは部屋の感じが全く違います」と話された。筆者は出会いの時からその人のことが気になっていた。はじめは「ワークショップも絵を観ることもコンサートも手伝いはするけど興味はないので参加はしません」と言われていた。毎日、会場の様子を見に来られるうちに「ワークショップやってみようかな」「コンサート、すごくよかつた」と言われるようになり、最後には油絵に没頭され、コンサートに涙し、絵も何度も繰り返し、観られていた。私は彼がアートに触れたことで、興味をもたれたのは事実だと思うが、それとともに、固まっていた彼の心の琴線に触れたのではないかと考えた。作品やワークショップ、演奏だけではなく、大槌町を訪れたこの活動に関わる人たちとの出会いもその要因の一つだと考える。また、この活動のメンバーである伊藤あずさは、親戚が宮城県石巻市にいたことが縁で単身、石巻で震災以降毎年、寄木細工の端材を用いた工作教室を行っている。材料は端材と接着剤、自前の車もスタッフもいないのだが、現地でのつながりができ、子ども達が楽しみにしている恒例の活動になっている。この伊藤氏の身軽に動くことができる活動は今後の活動を計画していく上で参考に

なると考える。大人数のスタッフでの画一的な活動ではなく、少人数のスタッフでも、臨機応変に対応できることが必要であると考えからである。活動を恒例的に継続するからこそ、被災者の生活の中に入って行って、豊かな時間と場所を提供することができる活動が必要であると考えからである。様々な立場の人の話を聞いている中で、被災者もボランティアも行政もNPOも、東北の人も東北以外から来ている人も、とにかく一人一人の状況や思惑が複雑で、方向性をまとめていくことは至難の業であると実感した。そこにストレスもあり、喜びもあり、復興の鍵もある。瓦礫がなくなって町は整理されてきたのであるが、被災者の心の栄養はより一層必要とされている。今回の訪問で、音楽や美術が必要とされているのだと確信した。実際、音楽の催しものは、多く企画されており、一年前より、参加者が増えてきているということである。家族や町の復興のために働き続けていく中で、楽しんだり、休息ができる機会は必要である。豊かな時間や場所を提供するという観点で考えると、個人や少人数のチームでも様々なことを企画することができる。自分のできる楽しいことを準備し、東北に行くことで貢献できることがある。ようやく我々一人一人が何か貢献できる時期になっている。より一人一人の個性や興味を出し合いながらこの活動をより充実したものにしてきたらよいと考えている。

4. 第3回の活動へ

第3回目は観光ホテルはまぎくを選んだ。このホテルは被災したものの、屋上に避難して、難を逃れることができたという記憶や、いち早く営業を再開し、復興のシンボリックな存在となっている。このホテルで行うことを考えた。

4-1. 開催概要

会期 2014年10月11日(土)~13日(月)

会場 三陸ホテルはまぎく岩手県上閉伊郡大槌町浪板海岸

コンサート 10月11日(土)17時~ 12日(日)19日30分~

ホテル内に作品を展示し、ホテルのロビーでアートワークショップ、ホテル外の3か所で、アートワークショップや公開制作を行った。第3回目の活動は、アート性を打ち出したワークショップを活動拠点のホテルとホテル外の3ヶ所で行った。

4-2. ワークショップについて

4-2-1. 粘土でつくる心の種

10月11日(土)13時~15時、ベルガーディア鯨山、森の図書館、講師、利根川佳江

参加者6名

風の電話でも知られるベルガーディア鯨山をワークショップの会場とした。この場所は家主の佐々木氏が、毎日作り続けている庭園があり、その中におとぎ話の世界をイメージさせる石造りの小さな図書館がある。また、亡くなった人とつながる思いになるといわれる風の電話が設置されている。利根川氏は豊かな感性を感じさせる繊細な作品を紙粘土等を用いて制作している。利根川氏はこの場所で新聞紙で作った芯に紙粘土を付けていきながら、その感性の行きつく形をこの種の種として制作するワークショップを行った。幻想的な風景の中で参加者は、新聞紙と紙粘

土で思い思いの形を造っていった。心の種というテーマがありながらも紙粘土での自由制作に近い様子もあったが、テーマはきっかけで、自由に粘土で形をつくることに主眼をおいていた利根川氏の思いの伝わる活動になった。



写真7 心の種

4-2-2. 顔っておもしろいね

10月12日(日)13時～15時、虎龍山吉祥寺 講師、石原瑞穂、参加者6名

吉祥寺は、震災直後は避難所になっていた。広い集会所や水がなくても使用できる汲み取り式のトイレがあり、そのトイレを子ども達を中心となって清掃し、皆が汚さないように気を付けて使用するなど、ここでの生活は、長引く避難所生活の中でも節度を保った生活であったという。この集落の慶事と深く関わりがあり、禅宗であり、緊張感のある佇まいのこのお寺をワークショップの会場とした。石原氏は顔をテーマに制作を続けている作家である。ただ、震災後のつらい時期に、自分の顔を見つめての制作は厳しいと考え、誰かの特定の顔ではなく、顔をきっかけとして、制作するという設定とした。石原氏はとにかくある材料で、何も決めず、極力ワークショップの枠組みを付けずに制作をすることにこだわった。参加者はたくさん集められた材料の中から、顔の土台になる材料、パーツになる材料を自由に選択し、それを組み合わせ、制作を進めた。これは福笑いに近い感覚で、非常に楽しい制作となった。枠組みを付けなかったからこそ、制作の自由度が保たれ、制作の方法によっては重い表現になりがちな顔がユーモアセンスにあふれた顔となった。石原氏は参加者の作品を集合させて巨大な顔に構成する構想をもっていたのだが、今回は参加者が少人数だったために実現しなかったのだが、集められた顔でどのような顔ができるのか非常に興味深いところである。



写真8 顔っておもしろいね

4-2-3. スケッチピクニック

10月12日(日)13時から16時 ホテルからベルガーディア鯨山まで歩き、ベルガーディア鯨山で制作、講師、朝比奈賢7、参加者14名

スケッチピクニックを企画した朝比奈氏はベルガーディア鯨山の佐々木氏に深い感銘を受けた。石を一つ一つ切り出し、樹を1本1本植え、庭を造り、図書館を造り、風の電話を造り、丹念に

植物や野菜を育てる。朝比奈氏はアートをテーマとした場をつくりたいと構想しており、東北から帰宅後、湘南にアートハウスを開館させた。ホテルはまぎくからベルガーディア鯨山までを散策しながら、気になったものを収集したり、イメージを膨らませたりした後、ベルガーディア鯨山の庭で自由に制作をするワークショップを行った。制作する前提があると、普段は見過ごしてしまう景色やものが違ってみえてくるのである。散策をしながら感覚を働かせ、制作に入る。学童保育の子ども達の参加があり、震災後に心が落ち着かなくて、心が荒れている様子の子供達が制作に没頭し、想像的で豊かな時間を共有できたワークショップとなった。



写真9 スケッチピクニック

4-2-3.ホテルはまぎくでのワークショップ

10月11日(土)~13日(月)11時~16時 担当、金子牧 参加者42名

ホテルのロビーや通路に作品を展示し、その中でワークショップを行った。ビーズのアクセサリ作りと工作、油絵制作を行った。ビーズのアクセサリ作りは第1回目から人気があり、参加者が多く、筆者達が帰った後も仮設住宅で制作が続けられていた。それで、新たな種類のビーズを用意し、交流をしながら制作を行った。油絵制作では、第1回目、第2回目の参加者が来場され、制作を行った。工作は「ユルフワ君とシュワハナさん」という教材で、金子氏が勤める造形教育を行う会社のカリキュラムである。第3回においては会社の協力を得ることができたことも新しい展開である。この活動に対しては、金子氏の会社から田口氏、丸山氏の派遣もあり、材料や道具がよく準備され、支援も行き届いたものであった。田口氏と丸山氏は今回が初めての参加であったが、参加者の様子からこの活動の意義を強く感じたとのことであつた。また、筆者はホテルをはじめ、各ワークショップのサポートをしながら各現場を見て、感じた事をドローイングしながら、時間と場所性を一つの画面に閉じ込めるというコンセプトで公開制作を行った。見学する人がいれば声をかけ、制作に誘うという意図をもって行った。



写真10 ホテルでのワークショップ

5. 地域社会の中で展開されるアート

「3.11とアーティスト 進行形の記録」という展覧会が水戸芸術館現代美術センターにおいて震災の翌年の2012年に開催された。展覧会カタログの中で学芸員の竹久氏は、次のように述べている。「『作品』なのか、『支援』なのか判然としない活動や展示を含め、アーティストがともに

葛藤のなかで行ったさまざまな営為をひとつの場所に併置し、相違点もしくは類似点や共通点をそのあわいから浮かび上がらせ、観る人がそれぞれに感じ、『考える場』をつくることを目指した。さらには、アーティストが高い感度とそれぞれの考えと技術をもって、大災害と大事故という社会のアクチュアルな事象にどのように向き合ったか—その多様性と複雑さとをともに示すことで、社会システムと同じように、3.11によって激震を受けた『アート』を、その後の模索とともに記録に残し、今一度、アートの意義についてあらためて考えたいと思った」⁸竹久氏は震災前から地域社会の中で展開されるアートに興味があり、震災後ツイッターで入手する様々なアーティストの活動を確認したという。90年代以降2000年代から各地で行われるようになった街中でのアートプロジェクトに携わってきたアーティストの中には、被災地に入って自らの動きを模索しながら活動している者がいる。アート活動ではないボランティア活動を行い、その中で様々な葛藤をもつ。自分にできることをアートに限定せずに行っていく中で表現する必要性に出会った時からその一連の動きがアートと認識されるのではないかと考える。その地域に入ってすごした時間とつなぎあげた人間関係とが地域社会の中で行われるアートの鍵となる。筆者は2006年に日比野克彦氏監修の大宰府市で行われた「FUNEプロジェクト」、岐阜市で始まった「こよみのよぶね」中村政人氏監修の氷見市で行われた「ヒミング」など地域で行われたアートに制作担当などで関わり、人が集まって、寝食をともにしながら、その地域のことを様々な考えながらすすんでいく活動に豊かな時間の創出とアートの可能性を感じた。その感覚で「東日本元気アート」の活動に対峙した時に「ものたりなさ」を感じるのである。

6. 多様な活動

自分達のできることを想像し、現地に入っていく活動の始まりは同じであるが筆者たちが行ってきた「東日本元気アート」の活動は、5で述べた地域社会の中で展開されるコミュニティーアートのプロジェクトとは性格が違うものであると考える。現地に入ってから、それぞれの作家やチームの現状や行いたい事柄によって多様な活動が展開されていくことが、多様な状況にある被災地において必要と考える。この活動に参加したアーティスト(筆者を含む)がこの活動の後に感じた「ものたりなさ」は、コミュニティーアートで形成されるつながりを想像していたからではないかと考える。アーティストがコミュニティーに入っていく活動があれば、被災後のセンシティブな時期に会場を準備して参加者を待つというスタンスも必要であるのではないかと考える。また、2017年3月11日発行の日本経済新聞に、「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」について書かれている。「日本では、東日本大震災をきっかけに顕著になっている。」⁹「アーティストと一般の人々が対話しながらプロジェクトを進め、社会の現状を変えようとする過程そのものを作品とみなすのが特徴だ。」¹⁰とあり、コミュニケーションアートの中でも主張が強いものとなっている。「ただ現実そのものを変革しようとする側面については社会運動とどう違うのか、果たしてアートといえるのかとの疑問がついて回る」¹¹という存在となっている。鷺田清一氏は「素手のふるまい」で写真家の畠山氏とアーティストの川俣氏をアーティストが社会的な使命感をもつことに否定的な立場の作家として取り上げている。畠山氏は2012年のベネチアビエンナーレ東日本大震災を取り上げた「みんなの家プロジェクト」について「向こうの人がみたら日本人が協同で作業をしていて、やられた人間が負けるもんかとやっているようにしか見えないというこ

とがあります。ただ実際にそこでやっている建築家たちは、被災地の人たちに対して何ができるかという意識で関わっているわけでしょう。でもヴェネチアから見たら、内側の人間同士でやっているようにしかみえない。だから、距離によって悲劇に対する感受性というか、理解の仕方というのは全然違う。」¹²と「距離」という言葉を使って表現者と受け取る側の多様性について述べている。川俣氏は、「パブリックな場での個人の行為が、どのようにコントロールしても、自分から離れて多くの人たちの意見の中で一人歩きを始め、自分とはまったく別の人たちの評価の中で、作品が出来上がっていくものだというのを教えてくれた。パブリックということは、個人の責任が見えない、その他大勢のモラルが強力な権力となって語ってくる場である」¹³と述べている。これは、個人の行為と別の人たちの捉え方の「距離」によって起こるものではないかと考える。この「距離」が一人一人違うために、「アートの社会的な使命感」をアートの意義として用いることによって単一的で浅い、表面的なものになってしまう危険性がある。川俣氏は既存の美術言語や流行、スタイル、綺麗なもの、美しいもの、美的価値などの社会的規範からなる常識的言語に裏打ちされた美なるもの全般に懐疑を示し、それらを否定し、アートレスを提言し、アートレスであることが、既存のアートからの自由度を持ち得ることになるとして、それが、川俣氏自身とアートの距離の持ち方であるとしている。畠山氏は、傑作作品をつくるための努力や傑作のための多くの要素はいくら結集しても津波という自然に流し去られてしまい、その後、人間のプリミティブな部分を知ることが必要ではないかとしている。鷲田氏が「まずは被災地に身を届け、人々のあいだにぬっと顔を出した。そのとき、アートの意味を問うというよりも、生き(延びる)ということの、苛酷でだだっぴろい人類史的ともいえる地平にどんと放り出され、アートにその場所がないこともありうるという感覚に、ぎりぎり切り揉まれたのではないかと想像する」¹⁴というこの状態はアートレスな状態であり、「どんな意味があるのかよくわからない小さな『手』仕事の錯綜のなかで、だれもまだ見えていない結びつきを創ろうとする世界はこのままでは壊れてしまうかもしれないという胸騒ぎに続く身震いがもしアートの初期状態なのだすれば、アートはさまざまの人たちを巻き込みつつ、世界の調律を未知のそれに切り換えようとする行為だともいえる」¹⁵何もない状態から生まれくるもの、ここにアートの本質をみることができるのではないか。「居ても立ってもいられなくて、そしてじぶんが深く傷つく予感もないではなかったが、それでもあえてそういう場所に身をおき、そこでだれかと逢い、静いにも引きずり込まれ、ときに憔悴し、ときに逆に被災者から慰められすらしながら、なんとか明かりの射し込む隙間を開こうとした。被災地の人たちのために、そして未来のじぶんのために。あえてみずからをヴァルネラブルな(脆弱)な場所に置く、そのような身ごなしが、それこそブラックホールのように、他者のひしゃげた心根をぐいとひきこむことにもなったのではないか」¹⁶この状態は、アートで元気づけようとか、なぐさめようということを掲げていないが、アートレスな状態でその場、その場での自分の気持ちに合ったことを行っていった場合、結果として、人との関係やコト、モノが形成され、アートとなりうるということであると考えることができる。東日本元気アートの活動は、社会的使命を意識されており、またアートレスといった状態ではなかった。アートレスな状態で地域に入り、時間をかけながら、人とのつながりの中で自分に関われることを探していくといった活動は、アートの本質の部分をしているのではあるが、一方で、絵画や彫刻といった表現方法も存在し、アートレスで長時間活動できない、それを望まないスタンスも存在する。被災地

の多様性をかながみると、多様なことが存在してよいのではないかと考える。野田文隆氏は、災害後、「ある時間が経つと、個別的な取り組みとしてのこころのケアが語られ始める」¹⁷「耐え、我慢する人たちはあまりこころの問題を表出することを好まないという」¹⁸「こころの苦悩は苦悩として表現する術をもたなければ直截にはあらわれてこない」¹⁹「トラウマを表出するには、その人なりの、あるいはその文化なりの孵化時間が必要である。語らずすごしてきた人々が語り始めるには何か、琴線に触れるきっかけがいる。それは時の経過であつたり、家族や地域社会での癒しであつたり、支援者の寄り添う姿勢であつたり、あるいは悲嘆からの回復の決意であつたりする。被災者を支援したい人はその孵化時間を共に共有するしかない。」²⁰東日本元気アートの活動は被災者の琴線にふれ、体験を語るきっかけとなったことがあつたと考える。「優先性だけが緊急時の大事ではなく、むしろ優先性のないものを大切にする精神が潤いを与え、回復への力を養うのではないだろうか。説明可能な都市型の治療モデルを適用するより、説明の難しいローカルな文化を尊重し、こころ病む人やマイノリティのようなこころ揺らぐ人たちをささえることに配慮すること、つまりミクロな文化への **cultural competence** を各々の中に培うことから、日本の包括的な復興は見えてくるように思う」²¹**cultural competence** カルチュラル コンピテンスとは文化を理解し、対処する能力と呼ばれており、アーティストが地域社会に入っていることそのものであると考える。新田氏らは、「被災体験からの立ち直りにおける被災者の心理的変化」²²で、「Aさんは震災によって、『身近な人の死』を経験した結果、しばらくは『やるきのない自分』であつたが、震災後しばらくして『老人大学での活動』を始めることにした。Aさんにとっては、それが心の荷を降ろすポジティブ感情の経験であり、その後【被災体験を話すことが出来るようになったこと】という」²³と述べている。被災地でアートにできることはあるのかの問いに対して、まだ明確な答えを出すことができない。

1 須藤一郎，紀子夫妻が主催する個人美術館、平成2年に自宅を開放して、美術館活動を始める企画展、若手作家の育成、海外でのアートフェア等の活動を行っている

2 倉林靖，「震災とアート」，ブックエンド，2013年，pp26-31

3 3.11とアーティスト 進行形の記録 水戸芸術館現代美術ギャラリー 2012年10月13日～12月9日開催

4 1964年生まれ。紙粘土や多様な素材を用いて手の感触を感じる」作品を制作する作家

5 NHK交響楽団バイオリニスト、N響メンバーによる室内楽で、学校や病院のコンサートに出演。海外ツアーでは、アジア、ヨーロッパ、アメリカ等の国を訪れ、2013年ザルツブルク音楽祭に出演

6 1957年生まれ。「顔」をテーマに多様な表現方法で制作する画家

7 1974年生まれ。ドイツやアメリカのアートフェア、スロベニア、小田原市のアーティストインレジデンスに参加している画家

8 「3.11とアーティスト進行形の記憶」水戸芸術館現代美術センター展覧会資料第98号 メディア・デザイン研究所編，2012年，p142

9 日本経済新聞，2017年3月11日 p44

10 日本経済新聞，2017年3月11日 p44

11 日本経済新聞，2017年3月11日 p44

12 「リア」震災とミュージアム，リア制作室，2014年，pp105-106

13 川俣正，「アートレス」，フィルムアート社，2016年，p60

14 「3.11とアーティスト進行形の記憶」水戸芸術館現代美術センター展覧会資料第98号，

-
- メディア・デザイン研究所編, 2012年, p152
- 15 「3.11とアーティスト進行形の記憶」水戸芸術館現代美術センター展覧会資料第98号
メディア・デザイン研究所編, 2012年, p153
- 16 「3.11とアーティスト進行形の記憶」水戸芸術館現代美術センター展覧会資料第98号
メディア・デザイン研究所編, 2012年, p153
- 17野田文隆, 「大震災のなかで」, 岩波書店, 2011年, p196
- 18野田文隆, 「大震災のなかで」, 岩波書店, 2011年, p197
- 19野田文隆, 「大震災のなかで」, 岩波書店, 2011年, p197
- 20野田文隆, 「大震災のなかで」, 岩波書店, 2011年, p198
- 21 野田文隆, 「大震災のなかで」, 岩波書店, 2011年, p202
- 22 新谷健介, 嘉瀬貴祥, 遠藤伸太郎, 大石和男, 「被災体験からの立ち直りにおける被災者の心理的变化 —阪神淡路大震災被災者の質的研究の観点から—」, 『まなびあい(7)』, 2014年, p141-150,
- 23新谷健介, 嘉瀬貴祥, 遠藤伸太郎, 大石和男, 「被災体験からの立ち直りにおける被災者の心理的变化 —阪神淡路大震災被災者の質的研究の観点から—」, 『まなびあい(7)』, 2014年, p148
- 写真1, 筆者撮影 2012年4月27日
- 写真2, 筆者撮影 2012年4月28日
- 写真3, 筆者撮影 2012年4月28日
- 写真4, 筆者撮影 2012年4月28日
- 写真5 筆者撮影 2013年7月7日
- 写真6, 筆者撮影 2013年7月7日
- 写真7, 筆者撮影 2014年10月11日
- 写真8, 筆者撮影 2014年10月12日
- 写真9, 筆者撮影 2014年10月12日
- 写真10, 筆者撮影 2014年10月12日